



佑 啓

社会福祉法人 佑 啓 会 ふる里学会
〒290-0265 市原市今富 1110-1
TEL 0436-36-7611
発行者 里 見 吉 英
編集者 三 股 金 利

不適切な言葉

古川 弘

「日本・精神薄弱」とは何事か！やまと魂をなんと心得ておるか！これは、昭和二十年以前の古い時代の話で、某軍人さんが、日本帝国と障害者用語を重ねて、採り違えてしまった話である。この話題を私は、福祉の道に入った一九五二年以降、耳にしたのであるが、それ以来、私の心の隅にひきずってきた課題である。これと併行して、医学的分野の精神遅滞、教育的視点からの発達障害・或いは心理学視点など、専門的学理で用語が課題視されてきた。

その後、一九六〇年、「精神薄弱者福祉法制定後」、「知的障害者」の用語が、次第に巷に話題とされてきた。その流れの中で、当初は、コロニー化大規模施設の提案からスタートして、小規模化、非施設化、そして地域福祉の提唱によるグループホームの増設に進展しつつある。この点、知的障害者の用語が、社会化する中で、その障害者自身、ひとりの人として市民権を確保することが、新しい福祉への条件と云える。

「知的障害」用語の改定については、関係団体の共同研究による協議によって決定された。詳細は、別の機会として、要約すると、「障害区分として、知的障害・要因区分として精神遅滞を用いる。」としている。また、さきに述べた教育的視点からの発達障害は、私としては捨て難いものがある。結論的には、四団体の共同提案の「知的障害」を尊重するところとなった。

それ以後、次第にマスコミをはじめ、この用語が容認され、二〇〇〇年・平成十二年四月に、「知的障害」用語が、公的に容認されたのである。ここで、視点を移して、知的障害者への現状の指導・訓練の検討課題を提示しておきたい。おそらく、全国的に話題になっているところである。この否定に対して、提唱されている言葉が、「支援・援助」である。しかし、その「指導・訓練」の検討止揚が、不完全のまま、「支援・援助」が、強調されているところに、問題が生れるのではないかと、私は危惧している。

この点、私が参画している調査研究委員会では、課題とした「支援・援助」について、その概要を述べておきたい。「支援」対象となる人が、一定の目標に到達できるように様々な活動の総体を示す。あるいは、それら活動を支え、推進することを示す。単に、不適切用語の云い換えの感も否めない。保護・指導・訓練に對峙する用語ととらえるのではなく、それらの上位概念として位置づけることが必要であろう。

「援助」対象となる人に対して、その人が必要とする事柄を直接的に行う活動を示す。支援と混同するかたちで使用される傾向があるが、「支援」の上位概念として用いることが適当に思われる。以下、検討された用語のおもなものを、参考に提示しておきたい。

「本人」本人という言葉は、知的障害者を云い換えたに過ぎず、今後「利用者」「当事者」の用語を含め、検討する必要がある。

「保護(保護施設)」保護はたすけまもること。(広辞苑)法律用語として、「知的障害者」に対し、更生を援助することにも必要な保護を行い」とあるが、概念は、措置制度を背景としたものであり、今後の利用制度(選択性)に合致しない点を考慮したい。

「更生(更生施設)」法的用語として広義のリハビリテーションを意味するが、概念が不明瞭。一般に誤解を招き易い。受刑者等との比較において、リハビリテーションの理念は、全人間的復権とするのが一般的である。云いかえて社会自立・社会適応・自立支援・自立援助等がある。

「知恵おくれ」当事者の嫌悪感が強い。不適切用語として最悪。

「無断外出(ことわらずに)」承諾をえずに)外出する。かつては「逃亡・脱走」等を用語として使用。外出の自由がないような誤解を招くおそれがある。云いかえて、所在不明、行方不明とも云える。

「給食」広辞苑によると、学校・工場などで、生徒・工員に食事を支給すること。支給とは、あてがいわたすこと。

障害者の主体性が感じられない。集団主義的、恩恵的である。食生活としての視点がなないように思える。一般的に、食事(朝食・昼食・夕食)食事提供・食事サービスと云える。

「余暇指導」余暇とは、自分の自由に使える、あまった時間。ひま。いとま。(広辞苑)余暇は、個人の自由によるもので、指導されるべきものではない。

「授産」失業者又は貧困者(主に女子)に仕事を与え、生計を助けること。(広辞苑)このようにかつての救済主義の概念であり、現在の障害福祉の理念とは既にかき離れている。云いかえると、「社会就労・福祉的就労」といえる。

あわせて、「指導員」の名称も、既に施設では、課題視して、支援員・援助員の名称を利用している施設が増えつつあるが、その妥当性については、継続して明確にすべき課題としたい。

なお、この福祉施策の充実を論ずる場ではないが、関係者公私共、総合的な施策の充実・推進に努めているところであるが、特に医療・教育・労働の各専門分野との協働実践であること論を俟たない。

(理事長)

「法人後見人」きーん

橋爪 八重子

春らんまん、花々の鮮やかな彩りに、新緑の芽吹きが追いついて自然は疾くすばらしい。美しいよそおいの中でも、次々と暗いニュースは後を絶たない頃です。

三年前、佑啓二十二号に載せていただき、その念願がかなって、昨春娘はふる里学舎にお世話になりました。ありがたことで、夢中で往復する内、早くも一年が経ち落ち着いた日々を過ごしております。地元でご希望の方に申し訳ないことです。娘はせまい家から広広とした立派な環境に慣れないのか、度々風邪を引き、一面倒ばかりおかけしていますが、私は安心致しました。二十八歳の娘は、老化を認めざるを得ません。気働きの必要もなく、生活苦や、夢や、欲の全く無い平穏な生活は老化を早める要因なのでしょう。

念ずれば花ひらくのご報告を感謝でお伝えし、どうぞよろしくお願い申し上げます。また、貴重な紙面を再度お借りすることになり、何も知らない私ごときがおかしいのですが、「成年後見法」について、私の想いと願いを書きます。

四月一日に法制化されよかったです。その活用方法はこれから親達が勉強し、方策を立てなければならぬと思います。早く「法人後見人」を作っていたらいいと願っています。

始まったばかりで理解できないことだらけですが、人間一人一人の生き方の締めくくりかもしれませんが、それぞれ事情と環境とお考えが違いますが、よき手立てを尽くしてこの制度を役立てたいものです。

或る新聞の社説に日本人の国民性から「この制度の利用が急速に広がる可能性は大きい」とみられていると書かれていました。悲しいことです。この問題は念じたてて駄目で、母親の執念を傾けなければと感じています。立派な後見人に恵まれ、何等後々の心配の無い方はうらやましい限りですが、大部分の方は、どこか何か不安があるはずで、我が家は、私たち自身の年齢的、健康上の不安が最高です。そして口きけ娘の問題です。

兄妹三人の末娘で、兄達は四十五歳と四十三歳で、家庭も子供も仕事もあり、普通の社会人として働いております。日頃は私たちに遠慮してか口に出すことはありませんが、血のつながった妹として親亡き後は面倒を見なければと、二人とも内心考えている事は伺えます。私としては、早く適確な「法人後見人」が出来れば、娘の全てを託したいのです。

「何も心配しないから」と、自分達にも、本人にも、兄達にも云ってあげたいのです。一般的に財産管理が先行するようですが、それは二の次で、お互いの人権擁護の視点からは非やらなければならぬと考えます。親亡き後、妹のことで兄達に精神的負担をかけさせたくありません。それこそ「ゆりかごから墓場まで」娘のことについて全て親として指示してお願いしておきたい心境です。娘個人のことでは私が念じて済んでしまいましたが、この問題は大変重要で、親達が行動しなければ遅くなるでしょう。良い制度が出来ても活用されないままになります。大きく云えば社会意識を変えろわけですから、容易ではない気がします。

先日千葉の公証人役場で種種質問しましたところ、「任意後見人」のことが主で、それほど財産管理を念頭においての説明でした。障害者の場合は家庭裁判所の窓口で相談するよう勧められ、こちらの質問の意図は通いま

せんでした。近く家庭裁判所に行つて教えていただくつもりです。もし後見人がお願いできたとしても、その費用の点や、その他煩わしいことで悩むのでは困りますので、私たちの場合はどうしても「法人後見人」にお世話になりたいのです。後見人に支払う費用も期間が長くなると負担増ですし、人選も難しく、問題も複雑だからです。出来ましたら家族会で勉強会を開いていただけたら幸いです。みなさまのご意見も伺いたいです。今までの特定非営利活動(NPO法)で、福岡、大阪、群馬で何等かの実践をされているそうです。

今年こそ誕生日に遺言を書きたいと願っていましたが、また延びてしまい書けませんでしたが、平成十二年四月二十日 七十二歳の誕生日に (橋爪恵子・母)

平成十二年四月二十日

七十二歳の誕生日に

(橋爪恵子・母)



一年を振り返り...

楠元 洋海

「気が付けば、四月一日」この一年間を振り返るとそんな思いがします。就職前に、あれこれと学舎のことを想像していましたが、今思えば福祉という名のひびきもつ固定観念に縛られていたと思います。そんな私の固定観念が剥がされた最初の出来事は、早朝六時出発の荷掘り。予想もしていませんでした。トラックに揺られて竹林へ向かう車中で、ホントに施設に就職したのかと疑いながらも、施設とはこんな事

をしていたのかと驚いた日を懐かしく思います。思えば四月、キノコが嫌いな私が配属されたのは、椎茸栽培を行っている第二林産科でした。しかし不思議なもので、学生時代まであんなに嫌いだつた椎茸に対して、次第に愛着が湧いてきました。特にA品と呼ばれる高値の椎茸が実り、それを収穫するときのうれしさには格別なものがあります。また、新しく設立された作業科ということもあり、生産活動へ向けた準備期間から携われたことは、今後の私にとって大きな経験となりました。寮生が歩きやすいようにと、道がなければ穴を掘ってでも道を作ってしまった。自分達のこだわりの道をみんなが何気なく歩く、そんな何気ないことがとてもうれしく思える瞬間でした。

今年度より新たに配属が変わり、木工科・通所部となりました。人一倍不器用で、不安もありますが、今までは違った環境を楽しんでいたという気持ちもあります。三月までは新人と呼ばれ、知らず知らずの甘えも多かったように思います。二年目となった今、そんな甘えは極力抑えたいと決心を固めた矢先に大きなミス。この一年間で少しは成長したのかと自問自答を繰り返してはみたものの、あまり変わらない自分に気がきました。ならば初心に戻り、気取らずがむしやに進んでいきたいと思っています。(指導員)

編集後記

「佑啓」発送先を調べていたら、見知らぬ名前がよくよく調べたら、前回まで機関紙に携わっていた職員であつた。寿退職した彼女達が、新しい姓と住所を、最後の「仕事」としてすっかり(ちゃっかり)リストに残してくれました。これからは、一読者として好評(酷評?)を戴ければ幸いです。三十七号をお送りします 堀金 兼太郎